イギリス
ロンドン

2013 年 8 月～2015 年 9 月　親子滞在　　子どもの年齢　長女（中1・13 歳～）　インター校　現地校
（2015 年記）
2015 年 10 月～2021 年 9 月　子ども単身滞在（2022 年追記）　子どもの年齢　（中 3・15 歳～大学卒業）　現地校

基本情報

気温	春（3～5 月）3～13℃　夏（6～8 月）8～23℃　秋（9～10 月）8～19℃　冬（11～2 月）-3～9℃
緊急電話	警察・救急車・火災　999
電圧	電圧 240V　周波数 50Hz　プラグ BF タイプ（3 本足） 日本から変圧器、要持参 変圧器を現地調達する場合は、日本人向けの中古ショップや、帰任する駐在員が手元の家財を手放す「帰国　売り」されているものがお勧め オンライン取り寄せはトラブルが多い
水	水道水（硬水）は飲めるが、気になる方はミネラルウォーターやポット型浄水器の「ブリタ」などを生活に取り入れている

買い物

日本の物	ロンドン西部（Acton/Ealing）、北部（Finchley）、中心部（ピカデリーサーカス周辺）に、食料品、書籍を扱うショップあり 韓国系のスーパーでも、調味料、お菓子、乾物、インスタント食品、野菜（山芋、レンコン等）が買える
食料品	大手スーパーチェーンが多数展開 スーパーによって価格帯が大きく異なる 高級→安売順に Waitrose,　Marks & Spencer(M&S)＞Sainsbury≧Tesco≧Morrisons, ASDA
日用雑貨	スーパーで大概は揃う 100 円ショップにあたる「Pound Land」があるが、日本ほど使えるものは見当たらない お気に入りの掃除用便利グッズがあるのなら、日本から持参した方がよい トイレのシートカバー（シールタイプ）を持って行くことをお勧め（現地で扱いなし）
学用品	W.H.Smith、Ryman　Stationery などチェーン店に基本的なものは揃っているが、品質は期待できない 日本メーカーの筆記用具はよく見掛けるが、高額 気に入っている文具(筆記用具、消しゴム、定規、筆箱たぐい)は日本から持ってきた方が無難で快適 中学生以上は、授業、自宅学習で必需品の電子辞書(和英、英和、英英)を日本で買っていくとよい iPad を授業で活用する学校も増えている 学校が支給する場合もあるが、一台持っていると安心
衣類	子ども服には消費税 VAT が掛からないので、大人服に比べ割安感あり 大人用はサイズが全体的に大きく、小さめの入荷量が少ない 小柄な女性ならば子ども服も視野に入れる ユニクロは、イギリスでは高額な方の衣類に分類され、値段は日本より高い 学校用のローファーや上靴は、日本の方が上質なので持参するとよい

交通

公共の交通	National Rail(鉄道)　Tube/Overground/Bus(ロンドン交通局の地下鉄/鉄道/バス)
運転免許	日本の免許から英国免許（EU 圏全土有効）に切り替え可 日本大使館で手続き後、DVLA（英国運転免許庁）に郵送申請 後者にパスポートと日本の免許を提出するとしばらく手元に戻ることはないので、パスポートを預けたくない場合は Swansea（ロンドンから西に 300 ㎞）にある DVLA 事務所で申請するとよい http://www.uk.emb-japan.go.jp/jp/ryoji/menkyo.html#3dvla

住居

住宅事情	総じて高額 日系エージェントの扱い物件に住む駐在員は多くいるが、物件が少なく、人気物件はすぐ埋まってしまう 不動産検索サイト Zoopla, Rightmove 等で現地エージェント扱いの物件も是非候補に

日本人が多く住むエリア	北　Finchley, St. Johns Wood, Swiss Cottage 西　Acton Ealing 南西　Wimbledon, Putney, Richmond, 北寄りの Surrey 州 東地区は、治安が不安で避けられがち
使用人	11 歳以下の子どもだけの留守番は NG のため、ベビーシッターを頼んでいる
治安 セキュリティ	日本人の多く住むエリアは治安がよいとされているが、それでも空き巣、強盗、車上あらしの被害発生 戸締りは厳重に、旅行や一時帰国の際の長期不在時には照明にタイマーなど要セット

教育

通った学校	1) カトリック系私立女子インター校 2) 英国国教会系の私立女子現地校
通った学校の詳細	1)はロンドン南部のキングストン近くにある 1955 年に設立されたインター校 11～18 歳まで、全校生徒約 250 人の少人数制のカトリック系の女子校 国際色豊かな学校で、日本人も多く在籍し、IB に定評がある 2)はサリー州にある現地の私立校 Y1～Y13 まで（男子は Y6 まで別学）、全学園生徒約 1500 人 地元のアングロサクソン系白人が 9 割以上を占めているが、ESL 対策も取り入れている マイノリティの大半は韓国人 日本人の入学は数年に 1、2 名と少ない(娘の学年は娘のみ)
塾 家庭教師	現地校・インター校対策にチューターを雇っている方もいる（口コミや、家庭教師センターの斡旋*） *日本人向けの家庭教師派遣エージェンシー：http://www.helloengland.co.uk/about.html、 http://www.isshonilondon.co.uk/ 日本式教育対策には、補習授業校(Acton,Brent,Croydon)、JOBA、ena、公文式などがある
習い事	日本だと縁遠いスポーツの習い事（乗馬、ゴルフ、ボート等）を手軽に、低費用で簡単にできる
アドバイス	・イギリスは非常に教育体系（公立私立、年齢、性別）が複雑で、学校もたくさんあり、豊富な選択肢に悩みます。お子様の年齢、性格、駐在予定期間、評判などを考慮して選んだとしても、入学しない限り、合う合わないは分からないと思います。日本と異なり、学校を変えることは決して珍しいことではないので、合わないと感じた場合は転校すればよいと割り切るくらいでもよいと思います。 ・帰国時に高校受験や大学受験にかかる学齢のお子様をお持ちの場合、安易に学年を下げたりしない方がよいと思います（9月以降の誕生日であったとしても、私立ならば下げずに編入できることもある）。学年を下げたがために、中学（高校）卒業資格が取れないまま帰国して、高校（大学）受験要件が揃わず、日本の同級生より一年遅れることになることもあります ・私立現地校やインター校探しに The Good Years Guide という学校案内本は現地の方々にも定評があります。日本の Amazon でも買えます。 ・教育省のパフォーマンステーブル（カウンシル毎にデータのダウンロードも可）や、Ofsted（教育監査局）の検査レポートも学校選びには大変参考になります。公的試験結果、英語が母国語ではない生徒の比率など、数字から学校のある程度の善し悪しが判断できます。 ・学校の先生方に分からないこと、悩みや要望を遠慮せず相談するとよいと思います。ある意味言った者勝ちの社会です。主張することで相互の理解が深まると思って、Parents’ Evening やメールなどをフルに活用してください。

病院

医療事情	公立医療機関の利用が原則無料となる NHS (National Health Service) という制度があるが、利用するためには、まず自宅付近の GP(家庭医)を決める必要あり
日本人医師	日本クラブ診療所、グリーンメディカル、ロンドン医療センターに日本人常駐医師がいる 日本人歯科医師も多数いる
薬品	常備薬や使い慣れた薬があるのであれば、日本から持参した方がよい

交流

日本人	子どもの学校、習い事、知り合いの知り合いなどを通じて自然と知り合うことも多い
現地の人	子どもがセカンダリースクールだと、親子揃っての「プレイデート（遊びの約束）」の機会はなく、子どもの友人の母親とも知り合うことはできず、相当意識しないとなかなか同世代の現地の人との交流は難しい 地域のボランティア、アダルトエデュケーションなどに入れば、比較的年配の方々とは知り合える
駐在外国人	インター校の保護者と知り合うチャンスもなくはないが、かなりステータスが高い方が多く、また日本人同様、出身国毎にまとまりやすく、なかなか交流は深まらない

伝えたいこと

先進国、英語圏。イギリスは伝統と先端が調和し、「紳士の国」といった良いイメージもあり、その中で首都ロンドンは海外駐在先としては他地域と比較して恵まれているとは思います。ただ、社会の仕組み、時間の感覚、人当たりなど相当日本人には相容れないところが多く、赴任当初、予定通りに物事が進まないことにストレスを感じることを覚悟しておいた方がよいと思います。いい加減な業者や店員が意外と多く、聞く相手によって、言われることが違うことも多々あります。

また「ストレス」という点では、駐在員婦人の間で「11月鬱」にかかってしまう方が少なくありません。サマータイムが終わると、一気に日照時間が短くなり、気候は寒く、どんよりとした雲に覆われる日々で滅入ってしまいがちです。クリスマス、お正月後に到来する「二月鬱」もあります。短時間でも、できるだけ外に出て日光を浴び、人と接することを心がけてください。浴びないと体内のビタミン D の生成不足となり健康を害する恐れがあります。

日本人社会があるので、住むエリア、子どもが通う学校によっては、それほど英語が話せなくても、なんとか生活はしていくことは可能です。ただ、やはり英語を話す（話そう）とするとしないでは、全く別の対応（それも良い対応）を受けることが多いのは確かです。英語を使う努力を重ねた方が快適に暮らせますし、同じ英語で苦しむ子どもにもいい影響があると思います。
移民が多く、正当なクイーンズイングリッシュを耳にすることの方が少なく、話す相手の英語も大したことがない、と開き直るくらいの度胸を持ってもよいとも思いました。

私たちの場合、中学生になった娘を連れて行きましたので、せっかくなら IB を取得して帰国したいとの思いでインター校に最初は入りました。結果的に、一年経て、現地校の Y10 に転入しましたが、この学年から 2 年間の GCSE プログラムが始まるため、科目選択は手探り状態でした。娘の同級生達は Y7 から3年間かけて、色々な科目を試し、好きな科目、得意な科目を選んだわけですから、GCSE に挑むなら、インター校を経由することなく初めから現地校に編入すべきでした。ただ、ある意味大変無謀なことだったので決して薦められるものではないですが、英語が全くできない中学生を海外に連れて行き、GCSE を受けるケースは、このようにないわけではありません。

インター校でも、現地校でも、iPad をはじめ、パソコンで宿題や課題を仕上げるのは、現地中学生ではごくごく当たり前のことでした。プレゼンソフトを使いこなせないことで、時間がよりかかってしまったりして、苛立つこともありました。ただ IT 世代の子どもは、ある程度感性で操作し、テクニックを修得できていましたが、日本で PC のキーボードや、インターネット検索に慣れさせておくべきだったとも反省しました。

楽しく「英語」を親子で修得する、という点で日本からイギリスやロンドンが舞台となった映画の DVD はたくさん持ち込みました（ハリーポッター、マイフェアレディ、メリーポピンズ、ダ・ヴィンチ・コード BBC シャーロック、ダウントンアビーなど）。
「日本語字幕→英語字幕→字幕なし」と繰り返し見ていても、毎回何か新しい発見に出会えました。
ロンドンは、エンターテイメントもそうですが、芸術、音楽、プロスポーツなどが日本とは比べられないほど身近にあるので、日系フリーペーパー「週刊ジャーニー」や、現地フリーペーパー「Times Out」などで、特別展や注目の試合日程などを気に掛けてチェックするのも手です。

子どもを学校に送り出してから母親が取り組めるお稽古事、ボランティアには事欠きません。ビザの種類によっては、家族ビザでも就労可能な場合もあります。但し、頻繁にレギュレーションが見直されるので確認は都度必要です。また仮にビザが OK でも、会社規定 NG の場合もあります。

口コミでお稽古事に巡り合えることもありますが、MixB の掲示板（http://www.mixb.jp/uk/les/les_list_f.php）で探すのも手です。但し、日本人が集まる掲示板で探り当てたお稽古事の参加者はオール日本人になりがちですので、現地の方々との交流にはつながりません。
私がオススメしたいのは、アダルトエデュケーションセンター等で開講している「建築講座」です。ロンドンの各エリアを 1 回 2 時間くらい歩きながら、講師から建築物の解説を受けることで、エリアの特徴、歴史背景をなんとなく学ぶことができ、地理に明るくなるメリットもあります。英語の理解力がついていかず聞き流すことも多いですが、見るだけでも楽しくなります。

階級社会を感じる機会も多々ありますが、チャリティー精神が旺盛な国で、年代の上の方はともかく若者の間ではダイバーシティへの理解が進み、人種差別されていると感じることはそれほどなかったです。むしろ人種で差別されなくても、黙っていて何考えているか分からない人間と思われていると、仲間に入れてもらえず差別された感じがするかもしれません。

とても豊かな経験ができ、異国で家族の結束が深まると思います。どうぞたくさんのことを吸収してください。

2022 年 12 月追記

学齢期が高い中高校生を海外赴任に帯同するか否かについての悩みもある一方で、いざ帯同して、帰国辞令のタイミングいかんでは「子ども単身残留」について考えることもあるかと思います。「日本での転学先」「ビザ」「コスト」「本人の意思」などの点を総合的に考えて、結論を出すことになりますが、我が家の場合、本人の強い意思により、子どもは英国に残ることになりました。

その経験から、幾つか追記。
・そもそも帯同すると決めたら、学校選びをする際、「単身残留」の可能性も視野に学生寮の付いている学校を候補にするのがよいかも。イギリスには歴史的に、11 歳から受け入れる「全寮制」型の現地校（ハリーポッターの描く世界）が多く存在しますが、時代に合わせ、中には「Full Boarding 全寮制」とは別に、「Weekly Boarding Student 平日のみ寮生活」と「Day Student 通学」からも選べるようになってますので、家族と一緒のうちは「通学」、単身残留となったら「寮生」となれます。幾つかのインター校も同様な仕組みを持っています。

・また、学齢期が高い中高校生を帯同するなら、子どもは「Dependant Visa（家族ビザ）」でおそらく入国することになりますが、入国後、「Student Visa」に切り替え、備えておけば、いざという時慌てずに済みます。
但し、切り替えをするのならば、在籍している学校が Confirmation of Acceptance for Studies（通称 CAS）を発行できる認定校（※）でなければならないことが必須です。
※https://www.gov.uk/government/publications/register-of-licensed-sponsors-students

・単身残留には、「ガーディアン」問題もあります。
イギリス国内に住む者をガーディアンとして立てなければならないので、頼める現地の友人知人がいるのならばよいですが、いない場合は業者に委託する道があります。必要あれば、業者はホームステイ先も斡旋してくれます。

・帰国生枠で日本の大学受験する際、まれに、一部の大学では単身残留者に受験資格を認めないケースがあるようなので、注意が必要です。

親元を離れ、身の回りのことを自分でこなしながら、異国で思春期を過ごした日々は我が子にとってはかけがえのないものとなり、心身鍛えられました。

中高生を帯同するか否か悩まれている方多くいらっしゃると思います。
先々の人生が変わるかもしれない大きな分岐点であると思うので、お子様とよく話し合われて、それでも迷ったら、「挑戦(帯同)」するのも、あり、かもしれません。